

1. 研究テーマ

「生きる力」をはぐくむ評価のあり方

2. はじめに（主題設定の理由・研究の経過）

変化の激しい実社会を主体的に力強く生きていく力を培うという観点から、近年子ども達に求められる力が、『生きる力』（確かな学力、豊かな人間性、健康・体力）であり、新学習指導要領においても、「児童に生きる力をはぐくむことをめざし、創意工夫した特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」と考えが示されている。そこで各学校における児童・生徒や地域の実態に応じた教育課程の編成・実施とそれに伴う指導法の工夫が必要になってくる。

また、「児童の良い点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること」と評価についての考えが示されている。このことから、「生きる力」特に「確かな学力」の定着を考える時、わたしたち教師の指導を振り返り改善することと、適切な評価と支援により児童の学ぶ意欲を高めることは、きわめて重要な内容であると考えられる。

来年度から実施となる新学習指導要領では、「主体的、対話的で深い学び」の実現をめざし、これまで以上に児童生徒の主体的・協働的な学びが求められている。課題解決学習、体験学習、発見学習等の児童生徒が自ら課題を見つけ、解決方法を決め、基礎的な知識を活用して問題解決していくことが必要となる。このような流れの中で、私たち教師も、日常行っている評価を見直し、児童の学び・変容を丁寧に見取り、具体的・積極的な評価を行うことで次の学習活動への意欲を高め、確かな学力の定着を一層図っていきたいと考える。このような理由から、本テーマを設定した。

昨年度は、1枚ポートフォリオ評価とそれにリンクさせた評価言の研究・実践が、児童ひとり一人の自己有用感を高め、主体的な学びに繋がることが実証され、共有できた。

今年度は、児童の成長を効果的に見取るための評価について研究を進めることや、教師による評価言だけではなく、子ども同士の相互の声かけ・子どもたちによる評価等も新しい評価の在り方として研究を進めたい。また、枠のあるワークシートによる「学習」だけでなく通常のノートの利活用による「学び」についても研究を深めていきたい。さらにふり返りを子どもたちの言葉でまとめることや、山梨スタンダードの取り組み、学習感想を毎回続けること、それらはみんな学び合う評価にもつながっていくことになる。

3. 研究の経過

これまでの研究は以下に示すように実にさまざまな教科・領域にわたって多くの取り組みが行われてきた。

- ・ 2009年：国語科において、単元を通して1枚ポートフォリオを用い、読み取りの深まりや気持ちの変化を見取っていった。
- ・ 2010年：道徳において、学習前・学習後において児童の道徳的価値の高まりや心の変化を見取ることができた。

- ・ 2011年：1枚ポートフォリオの作成・活用の仕方をさらに研究しながら、生活科や社会科の授業を通じて検証を行い、表現する力が伸びたり、理解が深まったりすることを見取ることができた。
- ・ 2012年：算数・理科において、1枚ポートフォリオを振り返ったり、児童相互に交流したりすることで、自己肯定感が高められ、学習意欲向上にも効果が出てくることが確認できた。
- ・ 2013年：1枚ポートフォリオ評価法に焦点を当てた6年目として、国語と道徳で授業を行った。1枚ポートフォリオを活用することで、子どもの学びの足跡を子ども自身が振り返ることができ、意欲の向上や自己の成長の実感につながった。また、子どもが学習の最初と最後でどう変わったかの変容や、子どもの考え方や捉え方を見取って評価に生かすことなどができ、さらに研究の深まりが見られた。
- ・ 2014年：「評価する際の指標となる言葉」や「PDCAのサイクルに1枚ポートフォリオがどう関わっているか」については、課題の一つとして捉え研究した。
- ・ 2015年：これまでの研究の成果を生かしながら、いろいろなポートフォリオについての研究（1枚ポートフォリオに拘らず、いろいろな形のものを使って評価していくこと。子どもの実態・学年・教師の思いなどによって柔軟に変えていく。）や、評価した後の子どもの変容も継続して見ていくといった視点にも重きを置きながら研究を進めてきた。
- ・ 2016年：これまでの研究の成果を生かしながら研究を行い、1年生の生活科と音楽科の授業で検証を行い、低学年においてもポートフォリオ評価が有効的であることを実証することができた。また、6年の社会科・総合的な学習では、「自然災害とともに生きる」、「環境について考えよう」の研究を通じて、3人という少人数の学級であっても、子どもたちが互いに支え合いながら、懸命に学ぶ姿が、より深い学びへと到達できていることを見取ることができた。その一方で、「1枚ポートフォリオをどう広めていくか」、また、「教育評価という視点から、他の評価方法など研究の幅を広げていく必要があるのではないか」という課題にも取り組んできた。
- ・ 2017年度：2年生の学級活動の取り組みでは、学級力向上プロジェクトの実践を通じ、子どもたち自身が学級や学校における生活上の諸問題に取り組み解決を図りながら、子どもたち自身の意識も高まっていることを見取れた。また、3年生の算数科の授業では、ひとり一人の児童の実態をしっかりと掴みながら、話し合いを通じて児童が自分の立場を明確にしながらか発言することができる実践研究が行われていた。
- ・ 2018年度：2年生の国語科の授業では、1枚ポートフォリオを軸に単元構成がなされ、指導と評価の一体化が見取れた実践であった。また、4年生の算数科の授業研究では、課題設定やふり返りの場面で、1枚ポートフォリオが十二分に生かされ、また、評価言を意識し、教師の肯定的な言葉かけによって、子どもの意欲が高められ、教師と児童の温かな信頼関係が見取れる実践研究であった。

報告者 T1：川崎 剛
T2：飯島 恵

1 単元名 幅跳び名人になろう（C 走・跳の運動）

2 単元の目標

○幅跳びの行い方を知るとともに、短い助走から強く踏み切って遠くへ跳ぶことができる。

3 単元について

中学年の走・跳の運動は、「走の運動」（かけっこ・リレー・小型ハードル）及び「跳の運動」（跳び・高跳び）で構成され、「跳の運動」である「幅跳び」は、調子よく走って、普通の歩幅よりも広い長さを跳び越えたり、友だちとその距離を競ったりする楽しさや喜びに触れることができる運動である。

低学年の走・跳の運動遊びの学習を踏まえ、中学年では、走・跳の運動の楽しさや喜びに触れ、その行い方を知るとともに、かけっこ・リレー、小型ハードル走、幅跳び、高跳びなどの基本的な動きや技能を身に付けるようにし、高学年の陸上運動の学習につなげていきたい。幅跳びの行い方に関しては、短い助走（5～7歩程度）から、踏切足を決めて前方に強く踏み切り、遠くへ跳ぶことや、膝を柔らかく曲げて、両足で着地することを指導する。そのための具体的な手立てとして、場の設定を工夫したり、指導段階をスモールステップ化し、易から難へと進む系統的な展開を仕組んだりし、幅跳びの行い方が、着実かつ楽しく習得できるよう配慮したい。

また、より遠くに跳ぶために、自己の課題を見付け、その解決のための活動を工夫させる手立てとして、教師による評価言や、児童同士の教え合いを取り入れるとともに、1枚ポートフォリオを取り入れ、学びの過程や自己の変容を振り返らせたい。

そして楽しく運動を行うために、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、友達同士で学習の成果を認め合ったり、場や用具の安全に気を付けたりできるようにさせたい。

4 単元目標達成のための具体的な手立て

○場の設定の工夫

- ・6ピット設定（運動量の確保）
- ・コーン障害（高い跳躍 → 飛距離の出る跳躍）
- ・リング（調子の良い助走）
- ・踏切板、ロイター板（強い踏切の意識化・空中姿勢の意識化）

○指導段階のスモールステップ化（1歩助走→3歩助走→10m助走）

○評価言（指導上のポイントを絞った、児童に対する声掛けによる指導評価）

→ 付属資料P. 1～2を参照のこと

○児童同士の教え合い（言語活動・相互評価）

○1枚ポートフォリオによる振り返り

5 児童の実態（男子18名 女子18名 計36名：うち支援学級籍児童が男女各1名）

2年次までは3学級であったが、3年次からは1学級減の2学級となり、1学級の人数も24名から36名へと大幅に増えた。学習への取り組みは意欲的な児童が多いが、学ぼうとする姿勢や集中力、発言力、作業の速さや丁寧さ、学習内容の理解や定着には個人差が大きく、個別に指導が必要な児童も数名いる。

評価に関わっては、1、2年生の国語において、単元によって、毎時間授業のふりかえりカード(1枚ポートフォリオ)として書き、その時間に何を学んだか、友だちの発表を聞いてなるほどと思ったことは何か、自分の言葉でまとめることができた。外国語活動でも、「ふりかえりカード」を1年生から続けている。算数では、毎時間ノートに学習感想を書かせている。その結果、ふり返りを書くことに抵抗を感じる児童はいない。何がわかったか、できるようになったかを書くことができるようになってきた。中には、友だちの考えのよさを見つけて書いている児童もいる。

【体育科に関わって】

体育の授業では、どの単元でも興味を持って取り組む児童が多い。体を動かすことが大好きなので、休み時間にはよく外で鬼ごっこをしている児童が多い。しかしながら、きまりを守らなかつたり、ルールに従わなかつたりとマナーに欠ける児童も見られる。

低学年では走・跳の運動遊びにおいて川とびやゴムとび、スキップや横向きなどでリズムよく走る運動遊びに意欲的に取り組んできた。

新体力テストにおける、本学級の「立ち幅跳び」の平均記録は、「107.5cm」で、平成30年度の3年生の平均値である「129.7cm」と比べると、22.2cmのマイナスであり、本学級児童の跳躍力は大幅に劣っていると言える。

6 単元の評価規準

	知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
単元 の 評 価 規 準	<ul style="list-style-type: none"> ・踏切足で強く踏み切って遠くへ跳んでいる。 ・両足を揃えてしゃがむように着地している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の課題に気付くことができている。 ・動きのポイントについて見合ったり教え合ったりすることができる。 ・運動のポイントや、友達の動きの良さなどを、1枚ポートフォリオに記入したり、発表したりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・用具の準備や片付けを友達と一緒にしている。 ・場や用具、人の動きの安全を確かめている。 ・関心、意欲、態度に関わることを、1枚ポートフォリオに記入したり、発表したりしている。

7 本時の学習（全3時間の3時間目）

(1) 日時 2019年8月28日（水）5校時 （場所：体育館）

(2) 本時のねらい

○短い助走から調子良く踏み切って、遠くへ跳ぶことができる。

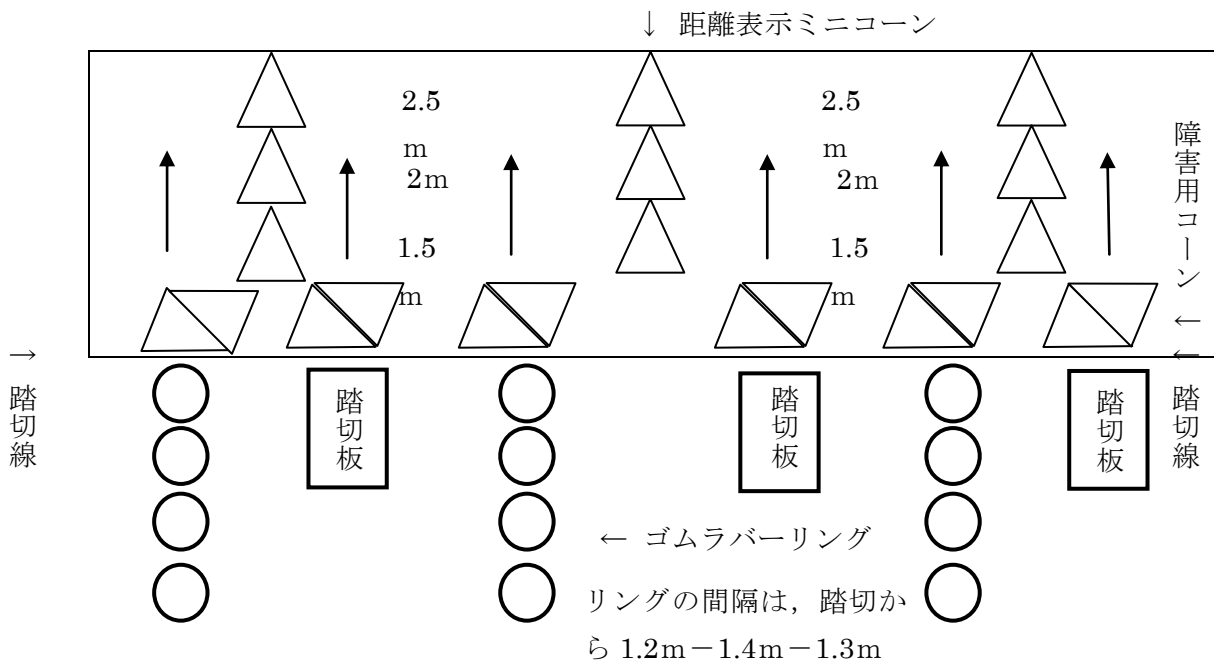
(3) 本時の展開

段階	児童の学習活動と内容	指導上の留意点
導入	1. 準備体操をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・前時のポートフォリオの振り返りから自分の課題を意識させる。(2名発表) ・ポイントを意識した友達同士で教え合いになるよう声掛けをする。 ・ポイント意識のための掲示物の用意
	2. ポイントの確認をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・助走一腕を振ってリズム良く ・踏切一板を踏み割るように力強く ・空中姿勢一手を上、体を大きく伸ばす ・着地一手を後ろに払い、両足を揃えて小さく 	
展開	3. 1歩助走跳びをする。(1周6回)	<ul style="list-style-type: none"> ・3, 4ピットの児童を中心に、1人ずつ端的で的確で、できるだけ肯定的な評価言を与える。 ・それぞれ次のステップに移る際には、ポイントの確認を行う。(適宜、上手な児童を、模範試技として紹介する。)
	4. 3歩助走跳びをする。(1周6回)	
	5. 10m助走跳び①をする。(1周6回) 交互に、リング跳び・踏切板跳びをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・リング跳びのピットで測定をする。
	6. 10m助走跳び②をする。(1周6回) 交互に、リング跳び・踏切板跳びをする。	
終末	7. 整理体操をする。 8. 後片付けをする。 9. 1枚ポートフォリオに今日の振り返りを記入する。	<ul style="list-style-type: none"> ・代表児童の発表内容を共有させる。

(4) 本時の評価

○短い助走から調子良く踏み切って、遠くへ跳ぶことができたか。

8 場の設定 (右へローテーション)



はばとび名人になろう!

3年2組 2番 名前

【学習前】「はばとび名人」になるためには、どうしたらよいでしょう?
 ① しそをつけてよく手をふる。とぶ時には、なるべくお尻をつかないで、つくなら前に手をつく。
 ② 27. 書きましたね。

①
 8/23 (金)
 今日の自分の活動をふりかえって (がんばったところ・できなかったところなど)
 1歩で助走をつけなくてとぶのはむずかしかったけど、上手にできた。
 3歩ではあまりとべなかったけど、すこし上手にできてうれい。
 友だちとの教え合い・友だちのいいところ なんでもとぶとぶのようになるよ!
 みんな大きく高くとんでいてすごかったです。コーンにあたってた人もいたけど、あとから上手になっていました。3年2組、全員、上手にできてきましたよ!
 安全 ◎・○・△ じゅんぴ・かたづけ ◎・○・△

②
 8/26 (日)
 今日の自分の活動をふりかえって (がんばったところ・できなかったところなど)
 ① わり台で助走でとぶのがむずかしかったです。でも輪っかごとぶのは上手にできた。
 ② でも、おんがん、念をきた感じがします。
 友だちとの教え合い・友だちのいいところ
 前の人々が色々なアドバイスをしてくれた。(もうちょっとしゃがもう!、手を上にあげよう!)
 色々教えてくれて、うまかった! 友だちのアドバイスを生かすとかできて、おもしろい。
 安全 ◎・○・△ じゅんぴ・かたづけ ◎・○・△

③
 8/28 (水)
 今日の自分の活動をふりかえって (がんばったところ・できなかったところなど)
 ① いつもより高く(みどり)台が遠くまで飛べた。(2mくらい)
 ② 輪っかまで飛ぶのは、2m40くらい飛べた。すごく遠くまでとべたんだね!
 友だちとの教え合い・友だちのいいところ
 千紗ちゃんや佑来くんが遠くまで飛んでた。佑来くんは、わり台で「ワッ」といって、たまたま上手にできて
 いた。千紗ちゃんは、高く両足をあげて飛んでいた。ちゃんと書いてきた
 安全 ◎・○・△ じゅんぴ・かたづけ ◎・○・△ 書いていて、

【学習後】「はばとび名人」になるためには、どうしたらよいでしょう?
 ① リズムよく短い助走をつけて「飛ぶ!」右足でふわっと飛ぶ!
 ② 右足で書きました!

「はばとび名人になろう」の学習の全体をふりかえって (さいじょう m 25cm → さいご m 95cm)
 最初は、飛び台で 1m30位しか飛べなかったけど最後は、2m以上飛べた。輪っかが前は、足が少し遠かったけど、どんとどんと飛んで
 最後は、2m50cm 飛べました。うれしいです。自分の記録が伸びた
 うれいね ◎

10 1枚ポートフォリオの分析（付属資料の「1枚ポートフォリオ」のページを参照）

<「はばとび名人」になるためには、どうしたらよいでしょう？> → 付属資料P. 3

- ・学習前は、58点の意見が挙げたが、学習後には、新たに64点が挙げられた。3時間の授業で獲得した学習事項が、反映された結果であると考えられる。

<各時間の「自分の活動をふりかえって」>（児童自身の振り返り）→ 付属資料P. 4～5

- ・1時間目よりも2時間目の方が、より多くの観点で、より具体的な振り返りができていた。
- ・2時間目は、「今日できていなかった点を、次の時間できるようにするために、課題点として挙げよう」という指示を出したが、その指示通り、次時の課題を挙げる意見が多く見られた。
- ・3時間目は、最終時間だったので、「できなかった点よりも、できた点を中心に書くように」という指示を出したが、その指示通り、自己の努力や成果に対する肯定的な意見が多く見られた。
- ・「友だちとの教え合い」に関しては、時間が進むに連れ、より多くの観点で、より具体的な内容を書くことができていた。また、教え合いが、記録の向上や、学習意欲の向上に対し、大変、効果的であったことが読み取れる。
- ・「友だちのいいところ」に関しては、時間が進むに連れ、より多くの観点で、より具体的な内容を書くことができていた。児童自身に、技術的に分析する視点が育ってきたことが読み取れる。

<「学習全体を振り返っての感想」>（単元末の学習感想）→ 付属資料P. 6

- ・自己の技術や記録が、向上したことを自己認知した上で、そのことを喜ぶ感想が多く見られた。

<「先生に言われて、嬉しかった言葉」> → 別紙P. 4～5

- ・「激励」よりも「技術指導」の方が多かったのは意外であったが、指導言が、跳躍技術や記録の向上に直結したとの実感を、児童にもたせることができたからであると考えられる。

11 指導言の分析（別紙資料の「逐語録」のページを参照） → 付属資料P. 8～12

※ 本授業実践にあたり、本部会（教育評価研究会）で役割分担をし、逐語録を作成した。逐語録は、教師・児童とも、すべての授業中の発言を記録したものでなく、可能な範囲で拾ったものであることをここにお断りしておく。また、評価言の声掛けの際の児童名の表記は、すべて割愛した。

- ・本時の中で、200回以上の教師による「指導言」（声掛け）が行われた。
- ・本時における指導言は、短い、断定的なものが多かった。
- ・本時における「指導言」は、分析上、「激励」と「技術指導」に大別された。「激励」は、「児童の跳躍の良さ等を認め、誉める言葉」、「技術指導」は、「児童の跳躍に対する、技術的アドバイス」である。
- ・本時における「指導言」は、全体的に見て、「激励」と「技術指導」が半々くらいであった。「激励」と「技術指導」を合わせた指導言が、全体の約1/4ほど見られた。（例：「そう、いいよ。もっとしゃがんで」など）

1 2 授業後の研究会より

<授業全般に関わって>

- ・運動量を確保したり、技量を高めたりするための場の工夫がなされていた。
- ・前時までや、本時の授業冒頭で指導したポイントを、児童自身がよく把握していた。
- ・練習途中でも、必要に応じて練習を中断させ、練習のポイントを確認していた。その際の児童へ問いかけの言葉も良かった。(なんだっけ!・どうしたっけ?など)
- ・児童が良い表情で、授業を楽しんでいた。
- ・担任ではない専科教員による飛び込み授業であったであったが、大変、落ち着いた態度で授業ができており、子ども達が、よく授業者の話を聞いていた。
- ・協力しながら積極的に後片付けしている姿から、日頃の指導が生きていることが感じられた。
- ・3時間の単元を通して、「もっと跳びたい」・「跳べるようになりたい」・「体を動かすの、ちょっと好きになった。」との意欲的な児童の声も聞かれた。(担任より)

<評価言について>

- ・授業者が、全員の児童に言葉掛けができるような工夫をしていた。
- ・言葉掛けは、短いものが多かった。また、肯定的な言葉掛けをしていた。
- ・幅跳びを長年研究していることが分かる言葉掛け、その子に合った的確なアドバイスがなされていた。
- ・「ふわっとしたジャンプ」・「ペタンと足をついて」など、授業者から、技術を高めるために、児童にイメージしやすい表現での言葉掛けがなされていた。
- ・肯定的な言葉掛けが、「よし」・「いいよ」・「その調子」など短い言葉だったので、より具体的な言葉がけをしてあげること、児童の評価に迫っていったのではないかと。
- ・2コース同時に声掛けをしていたので、2人同時に跳んでくると、どちらか一方、声掛けができない児童が生じる時もあったが、声を掛けられるのを待っていた児童もいた。

<児童同士の教え合い>

- ・授業者の評価言が、児童に教え合いに生かされていた。
- ・走り幅跳びのポイントを踏まえた、的確なアドバイスができていた。
- ・児童同士の教え合いでも、「両足そろっていないよ」・「着地はしゃがむ」・「手はパー」などの声が聞かれ、詳しくアドバイスできていた。
- ・児童同士、アドバイスをしてもらうことを楽しみにしており、それがやる気につながっていた。
- ・その場で「動き」もつけてのアドバイスも、多く見られた。
- ・肩をたたきながら、笑顔でアドバイスしている姿も見られた。
- ・児童同士、誰が誰にアドバイスをするのかが分かる工夫がなされていた。

<1枚ポートフォリオについて>

- ・本時では、時間の制約があったので、本時の振り返り欄を、最後まで書ききれない児童の方が多かったが、それでも短い時間の中で、多くの児童がよく書けていた。(担任：他教科においても振り返りを書くのに抵抗はない)

<指導助言者より>（前出は省略）

- ・授業者がポイントを意識した授業を行っていた。
- ・模範演技の児童の選出も「助走・踏切・空中姿勢・着地」の観点から、授業者が意図的に行っていた。
- ・対話的な学習（児童⇄児童・教師⇄児童）が成立していた。
- ・教えることと、引き出すことのバランスが良かった。授業者に教えられたことを受けて、児童同士の関わり合いからポイントを引き出して、「授業者と児童の関わり」・「児童同士の関わり」がうまくできていた。
- ・授業者の、児童に対する言葉掛けが柔らかかった。肯定的な言葉掛けが有効であることが改めて分かった。1枚ポートフォリオに、「友だちのよいところ」の項目があるが、良いところを探せば、ますます良くなっていく。
- ・「分かること」と「できること」の両方が大切。本時のように、ポイントを理解した上で、自分で体を動かしながら確かめる。この時に有効なのが言葉掛け。短い言葉で、分かりながら体を動かしていくことが大切。
- ・暖かい言葉掛けができていた授業であった。

1 3 成果と課題（単元全体の指導を振り返っての指導者の感想）

- 単元開始前の「走り幅跳び」の学級平均記録は、1 m 5 5 c mであったが、単元終了時は、2 m 1 1 c mであった。本単元の授業（3時間）を行うことで、学級平均記録を5 6 c m向上させることができた。
- 記録の向上の要因として、「場の設定」や「指導段階のスムーズステップ化」とともに、「指導言」が「跳躍技術の向上」に重要な役割を果たしたと感じられた。
- 思っていた以上に、児童同士による教え合いが、学習意欲の向上に対し効果的であったことが、授業の様子や1枚ポートフォリオからも見て取れた。
- 1枚ポートフォリオに取り組むことにより、児童の向上・変容・成長をより詳細に見取ることができた。児童も自身を振り返ったり、学習への意欲につながりやすくなった。
- 本研究の方針として、今年度は、「指導言」に焦点を当てて研究を進めるという方針であったが、「体育」のような「実技系教科」、それも「個人活動」こそ、「評価言」が、その「技能の向上」や「意欲の喚起」に対し、最大限の威力を発揮する場面であると感じた。
- △評価言を与える際、「技術指導」単独で与えるよりも、「激励」＋「技術指導」で与えた方が、より学習意欲の向上につながると思った。同様に、「激励」も、「よし」・「上手」だけでなく、良かった点を具体的に言ってあげた方が、より学習意欲の向上につながると思った。
- △1枚ポートフォリオの、最終項目の文言は、単元名との整合性を考慮し、「幅跳び名人になれたかな？」という表現にすべきであった。

1 4 参考文献

- ・勝見健史「形成的評価としての教師の『臨機応変な指導』—教師の『評価言』に焦点をあてて—」人間教育研究協議会 編『教育フォーラム36』（金子書房・2006年）